

水稻良食味品種「おいでまい」の作付推進と生産改善に向けて

■ 東讃管内の「おいでまい」生産者 ■

（東讃農業改良普及センター 藤井耕児、坂口幸雄、太田尊士、○池内洋、美馬仙治、間島正博、松家輝、多田祐真、吉田有梨花）

●対象の概要

東讃管内の「おいでまい」は、平成23年に5名が4.1haで試験栽培を始め、平成25年からは、一般栽培として公募により認定された生産者の栽培が始まり、徐々に栽培面積が拡大してきた。さらに、平成27年からは高松市香川地域が作付拡大地域に指定され、カントリーエレベーターでの荷受けが可能となったことにより、平成27年は、生産者491名、栽培面積225.4haとなっている。

●課題を取り上げた理由

平成22年に県の奨励品種に採用された「おいでまい」は、出穂後の高温条件下での登熟性が良好で、白未熟粒の発生が少なく、かつ食味良好な品種であり、平成25、26年と2年連続で、日本穀物検定協会の食味ランキングで最高評価の「特A」を獲得している。しかし、平成27年は「A」評価となったため、再度「特A」を獲得できるよう、気象に左右されずに収量・食味・品質を高める必要がある。さらに、需要に即した作付拡大のもと、平成32年には県下で3,000haの作付面積が計画されていることから、東讃地区でも作付推進を図ることとした。

●普及活動の経過

1. 「おいでまい」の作付推進

「おいでまい」は、認定栽培者でないと栽培できないため、JAと一体になって、水稻栽培講習会や地区座談会等で募集案内を説明するとともに、個別に農家に働きかけを行った。さらに、既存の生産者にも各機会をとらえて継続栽培を依頼した。

また、作付拡大地域である香川地区では、育苗センターやカントリーエレベーターが利用可能であることから、乾燥機械等を持たない生産者で

も取り組めるよう座談会等で、より一層の作付推進を行った。

2 「おいでまい」の生産改善

1) 栽培農家への技術支援

JAと協力して、現地講習会や説明会を開催し、「おいでまい」栽培マニュアルに基づいた栽培管理の徹底に努めるとともに、適宜ほ場巡回を行うことで、生育や病害虫の発生状況を確認し、適切な栽培管理・防除が行われるように技術支援を行った。

また、栽培ほ場には、掲示板を設置し、生産者の栽培意欲を高めるとともに、周辺の農家への啓発も行った。



現地講習会の開催



掲示板の設置

2) 「おいでまい」生産技術の検討

より一層の「おいでまい」の生産技術の向上を図るため、施肥改善展示ほやいもち病防除の実証ほを設置した。

① 「おいでまい」施肥技術の検討

温暖化に対応した元肥一発肥料の施肥技術を検討するため、中生一発を改良した中生一発（Jコート）について検討した。

② いもち病防除技術の検討

いもち病に対する残効の長いDr. オリゼスタークル箱粒剤と、パック剤で本田施用が簡易で省力的なコラトップジャンボPの体系防除の実証栽培を行った。

●普及活動の成果

1 「おいでまい」の作付推進

作付推進を行った結果、平成28年は生産者数559名及び栽培面積は260.3haとなり、平成23年に栽培が始まってから順調に拡大した。

表-1 「おいでまい」生産者数及び面積等の推移

	生産者数	栽培面積	1等米比率
平成23年	5	4.1ha	15.3%
平成24年	10	9.9ha	92.5%
平成25年	90	62.6ha	81.2%
平成26年	115	75.4ha	62.8%
平成27年	491	225.4ha	84.0%
平成28年	559	260.3ha	71.2%

2 「おいでまい」の生産改善

1) 良食味米の生産

東讃地区の1等米比率は平成24、25、27年産では80%を超えたが、平成28年産では登熟期間の日照不足等の影響により、71.2%に低下した。しかしながら、平成28年度開催の「おいでまい」の品質・食味コンクールでは、対象者240名のうち東讃管内から30名が応募し、内2名の生産者が金賞を受賞した。

2) 「おいでまい」生産技術の検討

① 「おいでまい」施肥技術の検討

Jコート肥料は、慣行の中生一発肥料よりも肥料効果の時期が早く設計されていることから、前半は葉色が濃く、後半は薄くなった。こ

のことから、展示ほの整粒歩合の向上、タンパク含量の低下により、品質及び食味値が高い数値となった。

表-2 Jコート肥料の展示ほの結果の概要

	品質	食味値
中生一発(Jコート)	2等上	72
中生一発	2等下	66

② いもち病防除技術の検討

高松市内で2か所設置した。1か所で、Dr. オリゼスタークル箱粒剤とコラトップジャンボPを施用した実証ほは、対照ほに比べて、出穂15日前のいもち病の発生株率が低くなった。

表-3 実証ほにおける出穂15日前のいもち病発生株率(%)

	実証ほ	対照ほ
川部町	0	0
香南町	1	5

●今後の普及活動の課題

1 病害虫対策技術の確立と普及

東讃管内は高松市の北部を除き、いもち病の常発地帯となっているため、今後も継続して、生産者に対し防除に対する啓発活動を行う必要がある。また、紋枯病多発地域では、出穂期防除のみでは抑制効果が不十分であることが課題となっている。

効率的な防除対策の確立のため、他の病害虫も含めて新農薬の効果確認を行い、防除効果の高い薬剤を選定しつつ、気象、発生予察等に基づいた適切な防除指導を行う必要がある。

2 高品質良食味米の生産

平成28年産「おいでまい」は、登熟期間の日照不足により心白・乳白などの白未熟粒の発生が目立った。カメムシによる斑点米は、山間部を中心に多く発生していることから、いもち病以外の防除も徹底する必要がある。

また、良食味米生産のためには、土づくりが大切であることから、作土深の確保、珪酸、鉄、苦土を含む土壌改良資材の投入が必要である。

以上を踏まえ、生産者への栽培技術指導を継続して取り組む必要がある。